

他者との関係性における完全主義傾向に関する研究

具志堅伸隆

(東亜大学人間科学部)

目的

完全主義は、「過度に高い、そしてしばしば非現実的な基準を設定し、追求すること」と定義される (Frost, Marten, Lahart, & Rosenblate, 1990)。完全主義の研究では当初、一次元の概念が用いられていたが、1990年代以降、完全主義を複数の異なる次元から捉えるアプローチが主流となっている。現在、用いられている主な多次元尺度は次の2種類である。一つは Hewitt & Flett (1991) の尺度であり、①自己志向的完全主義 (自分自身に完全を求める傾向)、②他者志向的完全主義 (他者に完全であることを求める傾向)、③社会規定的完全主義 (周りから完全であることを求められているという意識) から成る。二つ目は Frost, Marten, Lahart, & Rosenblate (1990) の尺度であり、①高い目標設定、②失敗過敏、③自分の行動への疑い、④親からの期待、⑤親からの非難から成る。これらの尺度を用いた研究によって、完全主義の高さは、抑うつ、不安、摂食障害など、様々な心理的問題を引き起こすことが報告されている (レビューは、Flett & Hewitt, 2002 を参照)。

上記の研究は、特に領域や場面を指定することなく、全般的な完全主義を検討しようとする研究である。これに対して近年、ある特定の領域に特化した完全主義、特に対人領域に焦点を当てた完全主義 (対人完全主義) が注目されている。これまでのところ、恋人関係 (Matte et al., 2012; Shea, Slaney, & Rice, 2006) や家族関係 (Wang, 2010) での完全主義が検討され、社会的適応を検討するうえで有効であることが確認されている。ただし、これらの研究で検討されている対人完全主義は、親密な関係に限定されたものであり、対人関係全般をとらえたものではない。そこで本研究では、対人関係全般での完全主義を測定する尺度を作成し、社会的適応との関係を検討することを第一の目的とする。

また、本研究では社会的適応の一つとして、社会不安に着目する。これまでのところ、完全主義は社会不安と正の関係を示すことが多くの研究で報告されているが (e.g., Nepon, Flett, Hewitt, &

Molnar, 2011; Xie, Leong, & Feng, 2008)、対人場面での完全主義と社会不安との関係は検討されていない。このことを踏まえ、対人完全主義と社会不安との関わりについて検討することを第二の目的とする。

方法

Frost et al. (1990) の多次元的完全主義尺度、桜井・大谷 (1997) の自己志向的完全主義尺度をもとに、対人完全主義尺度の項目 (18 項目) を作成した。質問紙の構成: 完全主義の尺度として、①対人完全主義尺度 (18 項目) と②自己志向的完全主義尺度 (桜井・大谷, 1997)、社会不安の指標として、③日本版 SADS (Social Avoidance and Distress Scale; 石川・佐々木・福井, 1992) と④日本語短縮版 FNE (Fear of Negative Evaluation Scale; 笹川・金井・村中・鈴木・嶋田・坂野, 2004)、対人領域での適応を示すその他の指標として⑤対人ストレスイベント尺度 (橋本, 1997) と⑥友人関係満足感尺度 (加藤, 2001) を用いた。調査対象者: 山口県内の大学生 196 名 (男性 159 名・女性 37 名)

結果と考察

回答に不備のあった 22 名を除いた 173 名 (男性 140 名・女性 33 名) を分析対象とした。対人完全主義尺度 18 項目について、因子分析 (重み付けのない最小二乗法、プロマックス回転) を行ったところ、固有値が 1 を上回る因子が 3 つ抽出された。第 1 因子は「対人関係で完全でありたい欲求」、第 2 因子は「自分の対人行動に対する疑い」であり、第 3 因子は「不和を過度に気にする傾向」と「否定的評価の忌避」が負荷していたことから「対人葛藤に対する脆弱性」と命名した。

各変数との相関係数を求めたところ、対人完全主義と自己志向的完全主義との間に有意な相関が認められた ($.19 < r_s < .56$)。また、対人完全主義・自己志向的完全主義と社会不安・対人ストレスとの間に正の相関が認められたが、その程度は、自己志向的完全主義と比べ、対人完全主義において、より顕著であった。